3校

「熊本地震への対応が行政マンとしての原点」

木村敬新知事・就任記者会見

木村敬新知事は4月16日、初登庁し就任記者会見を行った。木村知事は報道各社の取材に対し、令和2年7月豪雨への復旧復興を最大の県政課題の一つとして挙げながら、「なかなか声を上げられない方、弱き声、小さき声、そして被災された方々の辛い声にしっかり耳を寄せていく県知事になりたい」と抱負を語った。

（政治経済部・松本泰治）

県庁横断型で「渋滞解消」「地下水保全」

新副知事は2人とも生え抜き職員

木村　4月16日付で熊本県知事に就任いたしました木村敬です。今日は熊本地震の本震のあった日だ。8年前のあの日、私も熊本で被災し数日間不眠不休で仕事をしたことを今でも思い出す。熊本地震への対応こそが私の行政マン、そして今は知事としての原点にあるということを思い新たにした。

知事選で訴えた私のマニフェスト第一番目の項目に「県民の命と暮らしを守る」と書いた。熊本地震が私の原点にあるというところから始まっている。県民の命暮らしを守るということが、災害などの状況にある中で、なかなか声を上げられない方、弱き声、小さき声、そして被災された方々の辛い声にしっかり耳を寄せていく県知事になりたい。先ほど開かれた就任式でも県の職員の皆さんにそのことを申し上げた。

（知事選で）私はスローガンとして「くまもと新時代、共に未来へ」を訴えた。まさに県民と共に、県民が主人公の県政をつくっていきたい。どんな困難な状況であっても、自らの可能性を信じ、悩み、戦っている県民の皆さんに光を当てる行政を積極的に展開していきたい。最も重要なのは「令和2年7月豪雨からの創造的復興」と「緑の流域治水の推進」だ。そしてTSMC進出に伴う熊本都市圏の渋滞対策、半導体産業集積に伴う地下水への県民の不安、これらに的確に対応すべく県庁横断型の組織が必要だ。「渋滞解消推進本部」「地下水保全推進本部」を新たに設置する方針だ。

また、田嶋徹副知事から5月13日の任期満了を待たずに4月23日で辞職したいとの申し出があった。副知事として2期8年、さらには蒲島県政を屋台骨として支えていただいた田嶋副知事から「後進に道を譲りたい」という強いご意志があったので、その思いを尊重することとした。今後とも県政を別の立場から支えていただきたい。これに伴い、副知事の2席が空席になるため、新たに2人を選任させていただく。候補の1人目が元農林水産部長で現県病院事業管理者の竹内信義さん、2人目が元土木部長の亀崎直隆さんだ。23日の臨時議会で選任同意議案をおはかりさせていただく。

私は「現場主義」を徹底していきたいと思っている。職員には「現場を歩いてください」ということをお願いした。蒲島県政の良き流れをつくった象徴である「皿を割れ」の精神を維持し、より強めていきたい。

―「渋滞解消」「地下水保全」を担う推進本部について、もう少しくわしく。

木村　各部局が縦割りで進めないように、横串をさす組織を作るのが狙い。課題に応じて対応できる組織にしたい。設置にそれほどの時間はかからないと思うが、今日就任したばかりなので、「明日や明後日までに」ということになると私の庁内の評判は駄々下がりになってしまうだろう。少し時間を見て、現状と課題を検証しながらそれに関係する部局を挙げていく必要がある。私の選挙期間中にも感じたことだが、一つの課題を解決するには役所という組織の中で別のセクションと合わせて対応していったほうが解決に進むということが分かってきた。例えば渋滞解消には、子どもの塾の送り迎えへの負荷を下げれば効果的なんじゃないか。子ども関係の部局じゃないと気づかないことだが、柔軟な組織を立ち上げる中で課題対応を深めていく。地下水に関しても、安全安心の状況を県民が監視できるにはどういう観測体系をつくったほうがいいのか、県民目線に立った取り組みをしていきたい。

―2人の副知事職に関して、県では総務省出身者と職員からの生え抜きが慣例化されてきた流れがあるが、狙いは。

木村　私自身が中央政府に就職して、生まれも県外だ。どなたか国出身の副知事が必ずいなければならないということではないと思っている。私自身の能力を見た時に、必要なのは農業課題に対し的確に対応できる方、土木や技術職の専門知識の下で球磨川流域でしっかりと声を聞いてきた方が適任だと感じた。国との人事交流は部長級、課長級でも続いているし、国からの副知事が必要な場面があればその可能性も考慮していく。

―「木村カラー」はいつから出していく考えなのか。

木村　蒲島知事と私の違う点は何かというと、私は蒲島前知事よりも28歳若い。やはり、現場に出ていくということだと思う。就任前からまちづくりのイベントなどいろんなものに顔を出させていただいたし、職員や団体の方々との意見交換をおこなってきた。体力に関しては蒲島前知事よりもある、という自信がある。そこが一番の木村カラーだと思う。

―令和2年7月豪雨の対応について、組織改編なども含めてどう取り組んでいくのか。

木村　組織改編に関しては走りながら考えたい。現場の中で何が球磨川流域に必要なことなのか、何が足りていないのかしっかりと見届けたい。副知事時代の経験をもとに話をするのは良くないかもしれないが、例えば球磨川流域の人手不足問題に対応してほしいとの声がある。人材のマッチングを強化する必要がある。五木村、相良村に訪問させていただき、首長さんの意見を伺う。何度も足を運んで住民の方々の声をお聞きし、今後の組織体制を考えていきたい。

きむら たかし／1974（昭和49）年5月21日生まれ、49歳。東京都渋谷区出身。東京大学法学部卒、蒲島ゼミ一期生。1999年に旧自治省入省、2012年から16年の4年間にわたり熊本県に出向し、商工政策課長、総務部長を務めた。2020年消防庁防災課広域応援室長から県副知事に就任。今年3月の知事選で初当選した

旅行助成金問題受け、「ガバナンス強化を」

―県の旅行助成事業不正受給問題について、県のマネジメントの問題が第三者委員会でも指摘されているが、新知事としてどう改善していきたいか。

木村　ここまでこの問題がこじれた、時間がかかってしまったことで、県民に不安を与えてしまったことは当時まで県の幹部としていた者として、率直に反省をするべきだと思っている。第三者委員会からいただいた報告書の中身を精査した上で、内部のガバナンスを強化していきたい。

―選挙期間中から「日本一の農林畜水産業」と訴えていたが、県農業への思いを。

木村　熊本は畜産を含めた農業生産高は全国5位、品目の多様を見ると本当にバランスが良い。日本どころか世界に誇れると思っている。だが、これまで原材料供給地に甘んじていたのではないか、福岡や東京に売るだけに留まっているのではないか、もっと付加価値を高めていくことができるのではないか。なんとか稼げる農業を実現していきたい。担い手育成に着眼点を置いた農業政策を展開していきたい。

3校

インタビュー_木村敬・就任記者会見.indd 全ページ　2024/04/22 12:43